

近松と通俗軍談

— 『通俗列国志後編』 『通俗漢楚軍談』 を軸に —

神谷勝広

一 通俗軍談

近世前期、通俗軍談と称される読物—中国の各時代の治乱興亡を漢字片仮名交じりの文体で書かれたもの—が二十近く刊行されている。

具体的には、『通俗三國志』（元禄二年（一六八九）から五年）・『通俗漢楚軍談』（同八年）・『通俗唐太宗軍鑑』（同九年）・『通俗兩漢紀事』（同十二年）・『通俗列国志後編』（同十六年）・『通俗統三國志』（宝永元年（一七〇四））・『通俗列国志前編』（同二年）・『通俗元明軍談』（同二年）・『通俗南北朝軍談』（同二年）・『通俗北魏南梁軍談』（同二年）・『通俗統後三國志』（正徳二年（一七一二）・同三年）・『通俗十二朝軍談』（同二年）・『通俗宋史軍談』（享保四年（一七一九））・『通俗兩國志』（同六年）などである。

これらの通俗軍談によって、中国の歴史・故事逸話は相当流布し浸透したものと思われる。

二 研究史

通俗軍談と近世文芸との関係を論じた論文には、中村幸彦氏「通俗物雑談—近世翻訳小説について」（『関西大 学東西学術研究所紀要』第十五号 昭和五十七年三月）・徳田武氏「中国講史小説と通俗軍談—読本前史—」（『文学』一九八四年十月号・八十五年二月号）などがあつた。これらでは、読本などとの関連が軸となっている。通俗軍談と読本との関係について、徳田氏は、

読本の発生以前に早くから存在し、読本と共通の方法と性格を備え、読本に影響を与えた通俗軍談の存在は、長編読本の前史として位置づけることができる。文学史においては、前史とは、あるジャンルの発生以前に存在していて、そのジャンルと共通する方法と性格を備え、そのジャンルの発生に具体的な刺激と影響を与えているが、しかもまだそのジャン

ルには成りきっていない一群の作品を、いうべきである。読本に対する通俗軍談は、まさしくこの定義にかなっている。

とまとめている。

しかし、ここで疑問が生じる。読本は、通俗軍談が盛んに刊行された元禄末享保初と多少时期的にずれる。通俗軍談が陸続と世に出た時期の文芸（特に浮世草子・浄瑠璃等の時代物）は、通俗軍談をどう利用していたのか。この点に関する検証は充分ではない。今回、近松浄瑠璃を対象として検討し、通俗軍談との関わりが従来考えられてきた以上のものであることを示したい。

従来近松研究において、通俗軍談のうち、『通俗三国志』との関連は注目されてきた。大橋正叔氏「信州川中島合戦」―勘介の母の死―（岩波新日本古典文学大系『近松浄瑠璃集下』解説 平成七年十二月）が端的に整理している。（注1）

近松は享保四年上演の『本朝三国志』第二春長居城門前の場で、『通俗三国志』巻四十「孔明智退仲達」を利用しており、『三国志』の内容については熟知していたものと思われる。そして、『信州川中島合戦』では同書巻十五「徐庶薦諸葛孔明」「劉玄德三顧茅廬」「玄德風雪訪孔明」「定三分孔明出茅廬」の

四章を換骨脱胎し、用いている。

『通俗三国志』を用いていた近松が、他の通俗軍談に興味を持たなかったのか。実は、少なくとももう二つの通俗軍談（『通俗列国志後編』『通俗漢楚軍談』）は目に見ていた。

三 『通俗列国志後編』^{（注2）}

『通俗列国志後編』（元禄十六年）は、『通俗呉越軍談』とも呼ばれる。その名が示す通り、呉越の戦いを中心としてはいる。だが、周の景王より秦の統一までに至る治乱を叙しているので、これ以外の話も相当多い。

では、細かい語句レベルの検討から、『通俗列国志後編』利用を明らかにする。

『梟狩剣本地』（正徳四年）第二の冒頭は、二つの中国故事を並べる。（注3）

范蠡西施を湖水に沈め、呉起が妻を害せしも勇者のおもんずへき道とかや

范蠡の故事について、『近松語彙』は『平治物語』に拠れるものの項目の中で、次のように述べる。

梟狩剣本地のこの文は、……范蠡かくては国の為によくはないと思ひ、西施を誘うて小舟に乗せ、石湖に沈めたこと……のである。このこと通俗呉越

軍談・范蠡扁舟帰五湖の条に委しく見えてゐる。

『近松語彙』が『通俗列国志後編(通俗吳越軍談)』をおけたのは、原典『史記』で西施を湖水に沈めて殺してないからである。けれども、『近松語彙』は『通俗列国志後編』が直接の典拠だとしているわけではなく、いわば参考として示しているに過ぎない。一方、呉起の故事について、『近松語彙』は『史記』孫子呉起伝によるとする。なぜ、二つの故事を別々の典拠から考えるのか。『通俗列国志後編』で当たり直せば、范蠡の故事は『通俗列国志後編』巻九の二番目の章段「范蠡扁舟帰五湖」(具体的な丁数まで示せば五丁表から十一丁裏)に、

西施ヲ除ズンバ、吾越復覆亡スルノ患アラント、スナハチ一ツノ計ヲ設、大駕石湖ニ至ルニ及デ密ニ從者ニ仰テ、小舟ヲ湖口ニ用意セシメ、又越王ノ官者ヲシテ、密ニ西施ヲ誘テ帳外ニ出サシメ、范蠡左右ヲシテ、西施ヲ彼小舟ニ登、遙ニ漕出サシメテ曰、コレノ家國ヲ傾ルノモノ、少時モ留ベカラズトテ、遂ニ西施ヲ湖ノ心ニ溺

とあり、呉起の故事も巻九の六番目の章段「呉起殺妻求將」(廿二丁裏から廿八丁裏)に、

諸將訴テ曰、呉起ガ妻ハ、斉ノ女ナリ、今大柄ヲ得テ、必然斉ト内通セン……呉起コレヲ聞テ、大将ノ

印ヲ奪レン事ヲ恐、スナハチ妻ノ首ヲ斬テ、入テ穆公ニ見テ曰、主公臣ガ斉ニ通スルノ意アラン事ヲ疑、願クハ臣ガ妻姜氏ガ首ヲ以テコレヲ獻セン

と出てくる。二つの故事は、『通俗列国志後編』で同一巻の近いところに揃っているのである。

加えて、次のような事例も存在する。『百日曾我』(元禄十三年)の第一冒頭、

文宣王は大野に狩して麒麟を得
あるいは『曾我会稽山』(享保三年)第三に、

孔子は魯国の狩に麒麟を獲られし

とある。この表現は、間違いを含んでいる。麒麟を獲たのは、哀公であって、孔子ではない。『近松語彙』も、

孔子春秋を書いてゐた際、哀公狩して麒麟を得られたと聞き、我運命も尽きたと嘆いたといふ。孔子が狩に出て麒麟を獲たのではない。

と指摘している。なぜ、こういう表現になってしまったのか。この点も『通俗列国志後編』を見れば氷解する。同書では、巻八の四番目の章段名が「孔子獲麟作春秋」となっており、孔子が麒麟を得たかのような印象を与えるものになっている。これを記憶していれば、孔子が麒麟をつかまえたとは表現しても不思議はない。

また『国性爺後日合戦』(享保二年)第四にある次の文

章、

今生君臣の御名残も是迄、大丈夫死すれ共冠を捨すとかや、及ずながら孔門の子路が真似に候

この子路の故事は、もともと『史記』に見えるが、『通俗列国志後編』巻八「孔子獲麟作春秋」、

子路已ニ死ナントシテ曰、君子ハ死スルニ衣冠ヲ免ズト、矛ヲ地ニ擲テ、纓ヲ結テ死ス

に依拠していると考えてよいだろう。

以上から、近松は、『通俗列国志後編』を身近に置いていたと判断でき、特に巻八・巻九を気にかけていたことがうかがわれる。

右のことを踏まえれば、趣向との関わりも推測できる。

『国性爺合戦』（正徳五年）第三において、甘輝は韃靼王を裏切り国性爺側に味方しようと決意する。しかし、妻（国性爺の異腹姉）の縁に引かれて敵に付いたという誇りを恐れて、妻を殺しかける。この趣向は、『通俗列国志後編』巻九「呉起殺妻求将」、

呉起コレヲ聞テ、大将ノ印ヲ奪レン事ヲ恐、スナハチ妻ノ首ヲ斬テ、入テ穆公ニ見テ曰、主公臣ガ斉ニ通ズルノ意アラシ事ヲ疑、願クハ臣ガ妻妻氏ガ首ヲ以テコレヲ献ゼン

との関連を認めるべきであろう。(註4)

加えて『唐船嘶今国性爺』（享保七年）上巻に、天下に野心を持つ六安王と、それを諫める忠臣欧陽格子が出てくる。しかし、欧陽格子は六安王の怒りに触れ、塩漬にされてしまう。そして、六安王は、重ねて諫言すればこの通りだと周囲を恫喝する。

きやつがしが一寸もちらさず塩漬のひしびしほに
して、重てかんけんいふ者の見せしめにせよ

しかも、その塩漬のひしびしほを後で息子の欧陽鉄に喰わせる。忠臣の死骸を塩漬にし、しかもその縁の者に喰わせようとする趣向も、『通俗列国志』巻八「孔子獲麟作春秋」の子路の故事と関わる。

子路已ニ死ナントシテ曰、君子ハ死スルニ衣冠ヲ免ズト、矛ヲ地ニ擲テ、纓ヲ結テ死ス、石乙遂ニ子路ガ首ヲ斬テ、朝外ニ懸、群臣ノ従ザルモノアレバ、令ニ依テ罪ニ行フ……子路ガ肉ヲ醢トナサシメテ曰、孔丘ハ聖人ナリト聞リ、試ニ使ヲ遣シ子路ガ肉醬ヲ孔丘ニ饋与テ、ソノ知ヤ否ヤヲ覲ルベシ、使者旨ヲ承、醢ヲ奉テ行……使者来テ孔子ニ見テ曰、寡君新ニ立、敬テ小使ニ命ジテ奇味ヲ献ズ、夫子再拜シテ受玉フニコレ肉醬ナリ、遂ニコレヲ覆シメ、痛哭シテ中庭ニ入、弟子咸ソノ故ヲ問、孔子ノ玉ハク、コレ子路ガ肉ナリ……

子路が冠を外さずに死んだ後、莊公は群臣を威し、子路の死骸を見せしめのために塩漬の醢とする。そればかりか孔子に送りつけて喰わせようとまでする。これが『唐船嘶今国性爺』へ影響しているであろう。

さて、『通俗列国志後編』受容の場合、全巻を通じてというよりも、巻八・九に偏った利用の感がある。しかし、『通俗漢楚軍談』受容の場合、全巻的な利用を行っている。

四 『通俗漢楚軍談』

『通俗漢楚軍談』（元禄八年）は、秦末の混乱から漢楚の戦い、そして漢の天下統一までを描く。いわゆる項羽と劉邦の争いである。

近松作品の中で、『通俗漢楚軍談』と最も関係が濃いものは『唐船嘶今国性爺』（享保七年）と考えている。しかし、従来『唐船嘶今国性爺』に関しては、当時の風説が大きく影響していると見なされているようである。（注5）確かに風説も近松は利用したであろう。だが、一七二一年に台湾で起こった朱一貴の乱の主要な経緯を『靖台実録』に従って示せば、

康熙六十年四月、米価高騰に乗じて、朱一貴を首魁とする乱が起る。賊軍は、官府の腐敗を糾弾し、真主の出現を唱えたことから、人民の支持を得て勢い

を増した。そして、六七日の間に台湾のほとんど地域を制してしまふ。五月下旬から、官軍の反攻が強まり、賊軍内の仲間割れも手伝い、六月二十二日には、賊軍の敗北が決定的になる。朱一貴らは山に逃げが、結局捕まる。

と整理できる。これは、『唐船嘶今国性爺』の主筋とあまり関連するところがない。『唐船嘶今国性爺』は、

朱一貴は、今は刀鍛冶の子として育てられているが、大明の皇帝景泰王の皇子であった。その一貴は、軍師呉二明との出合いを契機に自分の血筋を知り、義兵を起こそうとする。その後、呉二明の弟子、欧陽鉄・齊万年と主従の誓いを成す。敵との戦いの中で、危機に陥った際には、欧陽明が一貴に扮装して乗り越えた。そして、最後は呉二用の機略によって、敵方の城を落とし、一貴が順成王と号して目出度終焉する。

というのが主筋といえる。実は、『唐船嘶今国性爺』のポイントとなる趣向は、『通俗漢楚軍談』から取り込まれている。

上巻から指摘していく。敵方の六安王が野心を抱き、天下を望む。そこで、鼎から天子の劍・宰相の劍・將軍の劍を造らせようとする。

我望を達するには、先天子の宝剣、都督宰相の剣、武騎將軍の剣、以上三振の雄剣なくては叶はじ

ここで、三本の宝剣の話が出てくる。『通俗漢楚軍談』卷四「張良宝剣說韓信」によること明らかと思う。張良は、天子の剣は劉邦に、宰相の剣は蕭何に与えた、あなたにはこの元帥の剣を与えたいといって、韓信を口説く。『唐船嘶今国性爺』では、天子の剣を一貴の義父が造ることになり、結局、その名剣は主人公一貴が手に入れる。つまり、一貴には、天子劉邦のイメージが被せられている。なお確認しておけば、三本の宝剣の話は、『史記』などには出てこない。

中巻になると、呉二用が登場してくる。彼は、義兵を起こし六安王を滅ぼすために、正当な血筋の皇子を捜していた。呉二用は、一貴を見て、「凡人平人の子ではなく、唐土四百余州の帝王王子に紛なし」と言い出す。義兵の旗頭となるべき「零落した帝の子孫」を求める話は、『通俗漢楚軍談』卷一「范増献策楚後」が影響している。項羽に秦討伐の大義名分を与えるため、范増は楚王の子孫（楚懷王嫡孫）を捜し出し、その子を祖父に同じ懷王と号させ、自分達の正当性をアピールする。つまり、呉二用が范増の、一貴が懷王の役回りである。このことは、呉二用が自分のことを「我は楚の懷王の師呉子が末孫」と

名乗っていることからわかる。

下巻に入り、一貴は敵方に追われ妹を連れ、呉二用の芙蓉岳へ逃げる。呉二用は天文を見ていると、帝星が現れるので驚くが、これはきつと一貴が間もなくやって来るのだと悟る。

凡三百六十五度の分野をはづれず、天に顕れ其国々ののりをしめず、五星のてんど十二周天廿八宿……北辰なんぎよく七曜九曜はぐんせい今顕れたるていせい、帰する本主を得せしめ給へ……呉二用朱一貴を一め見るより大きに驚き、こよひふしぎにていせい当山の上に顕れ、龍は五彩をなし雲に旺氣をこめたるゆへ、宵より天文を窺ふ

この部分は、鴻門の会の前夜、范増が天文を見ていて、劉邦こそ天運を備えていることに気付くところと関わる。

『通俗漢楚軍談』卷三「范増算運觀天文」、

五星ノ躔度十二周天二十八宿九州ノ分野三百六十五度晦朔弦望北辰南極…帝星耿々トシテ龍成五彩……

雲籠旺氣

と表現もよく一致している。呉二用と一貴が出会った後、歐陽鉄・斉万年が登場してくる。二人は、一貴の態度が大きいことに機嫌を損ね、「道をろんじ力をくらふるは相弟子のよしみ」と力比べを行う。そこで、一貴は、圧倒

的な力の差を見せつけ、歐陽鉄・斉万年を心服させ家来とする。力比べを契機に主従の誓いをするのは、『通俗漢楚軍談』巻一「項羽会稽城興兵」からの影響と思われる。項羽が于英・桓楚の二人を家来にしようとした時、二人から力を示せと言われる。ならばと、項羽は巨大な鼎を高々とあげて力を証明し、二人を家来とする。この項羽のイメージが一貴に付されている。『唐船晰今国性爺』ではこの後、軍議を謀るが、敵方が一貴の似顔絵の高札を掲げたために、身動きが取りにくいとわかる。そこで呉二用は歐陽鉄を身代わりに立てようと考え、斉の景公と田夫の故事を語り始める。この故事は、『通俗漢楚軍談』巻十「紀信采陽詐降楚」で、張良が紀信を劉邦の身代わりに立てる時に用いたものである。

すなわち、『唐船晰今国性爺』は『通俗漢楚軍談』から撰取した話を主筋のポイントへ配している。主人公一貴の造形においても、懐王の血筋・項羽の勇力・劉邦の天運を備えた人物になっている。『通俗漢楚軍談』を抜きに『唐船晰今国性爺』は成立しえない。それ程に関係が濃い。

『唐船晰今国性爺』と『通俗漢楚軍談』は、明瞭な関係がある。しかし、『唐船晰今国性爺』は晩年の作品である。どの辺りから『通俗漢楚軍談』は近松浄瑠璃と関わ

ってくるのか、改めて時期を遡って検証しておく必要がある。

『曾我会稽山』（享保三年）は、作品名からして中国と関わる。しかも、その冒頭は、

照射する火串の影のねらひ猟、狗は獣を追ふて殺し
人は其処を指しめす、今諸君は功犬なり、蕭何がご
とき勝処をさし示すは、功人也との古こと

という劉邦の言葉の引用から始めている。すなわち、「漢楚の戦い」絡みである。この作品で注目すべきは、割符の趣向である。第四で、曾我兄弟は、蒲殿からもらった割符を使い、警戒の網をくぐり抜ける。

何やつなれば御仮屋のそばちかく、ことはりもなく
忍び行、馬盗人か盗賊かそれ搦よとひしめけば、祐
成さはがずいやくるしからず、鎌倉より祐経殿へみ
つゝの御用の使、とがめ立して旁が所領の仇ばし
し給ふな、疑はしくは見られよと首にかけたる通路
の割符、是見られよと指出す兩人びつくり詞をかへ、
存せぬ事とて雑言申せし御免有、しんかいあんざい
とがめたりとは、すけ経どのへは必きたなしに頼入、
仮屋へは此辻を左へきれ、行当りの大かまへいざ御
通り候へと、馬鹿いんぎんのそらけいはく、けつく
敵の引入をすまし、顔にぞ別れける、兄弟のがる、

罅の口とらの威をかる此割符、蒲殿の御恩ぞと、御寮の飯屋の傍ちかく忍ひ入こそあやうけれ

『通俗漢楚軍談』でも、割符をもらう人物がいる。陳平から韓信が割符を渡される。『通俗漢楚軍談』巻五「韓信背楚逃咸陽」、

韓信カ曰我モ亦コノ心アリ然レトモ路々ニ関アリテ軽々シク通り難ヲ恐ル陳平ガ曰コレ又易キ事ナリ我都尉ノ職ニ居ヲ以テ関所ノ割符ミナ此ニアリワレ之ヲ御辺ニ贈ンモシ割符アラハ関所ヲ通ルニ何ノ難キコトカ有ン韓信拝謝シテ曰モシ割符ヲ賜ラハ千金ノ賜ニ勝ン

そして、韓信が警備の者に捕まりかけた時に割符を見せ

て難を逃れる。
只一騎咸陽ヲ出テ西ヲ指テ走リケリ兼テヨリ范增ハ常ニ漢王ヲ恐テ諸処ノ要害ニ番ヲ置テ日夜愈ラズ守ラセケレハ韓信巴ニ安平関ニ来リケル時番ノ兵推止メテ此ハ何クヘ行玉フゾト問韓信件ノ割符ヲ出シテ見セケレハ関ヲ守ル大将礼ヲ施シテ対面シ如何ナル事有テカ只一騎出玉フゾト云ニ韓信申ケルハ項王某ニ命シテ密ニ三秦ニ下知ヲ伝ヘシム此故ニ夜ヲ日ニ繼テ馳来レリトテ急ニ関ヲ出テ走リケリ

趣向として一致してゐることは明らかである。細かいこと

ろでもよく合致する。『曾我会稽山』で、曾我兄弟の言い訳が、

鎌倉より祐経殿へみつゝの御用の使

という敵方の密使になりすますものであり、『通俗漢楚軍談』でも、韓信は敵方の密使という言い訳をしている。

項王某ニ命シテ密ニ三秦ニ下知ヲ伝ヘシム

『国性爺合戦』（正徳五年）も、中国と深い関連を持つ。同作の第五で、追い詰められた韃靼側は国性爺の父一官を楯の表に縛り付け、国性爺に退却を迫っている。

国性爺、おのれ日本の小国より這出、唐土の地をふみあらし数ヶ所の城を切取、刺大王の御座近く、けふの狼藉くはんたい千万、これによつて親一官をかくのごとく召取たり、日本流に腹きるか但親子もろ共、すぐに日本へ帰るにおいては一官をたすくべし、承引なくばたつた今、目前にて一官を引はり切せん、とかくの返答はや申せと高声によばれば、今迄いさむ国性爺、はつと計にめもくらみ力も、落て打しほれ、諸軍勢も氣を失ひ陣中、ひつそとしづまりける

この父親を両軍対峙の際に引き出し退却を求める趣向は、『通俗漢楚軍談』巻十一「項羽欲煮大公」に依拠する。

項羽驚キ……韓信ヨク兵ヲ用フ我久ク此ニ在テ陣中

糧尽タレバ共ニ鉾ヲ争ヒ難シ汝等イカナル計ヲカ用
ント問ニ鐘離昧申ケルハ漢王ノ父太公コノ所ニアリ
明日尙陣相對スル時太公ヲ狙ニ載テ見玉ハ、漢王深
ク悲テ必ズ兵ヲ退ケン然ラバ乃チ太公ヲ免シテ帰シ
玉ハ若又退ズンバ速ニ煮殺シ玉ヲベシ……項羽……
自ラ軍兵ヲ率ヒ太公ヲ馬上ニ縛テ陣前ニ撃リ出タル
ヲ漢ノ兵望ミ見テ急ニ中軍ヘ報シケレバ漢王声ヲ放
テ大ニ哭キ……

韃靼方が項羽方に、国性爺方が劉邦方に対応している。

(注6)

『天神記』(正徳四年)は、道真伝説を軸にした作品で
あるが、これも中国との関係が深い。この作品で、趣向
として一捻りしているのは道真を諷する方法である。時
平方が贖手紙を作り、それを唐の帝との内通の証拠とで
っちあげる。これは、『菅家瑞応録』・『天神絵巻』・『天神
縁起』・慶安刊本『天神本地』・安楽寺本系写本『天満天
神縁起』などと異なる。これらでの讒言は、醍醐帝の即
位を妨害した、あるいは内裏への放火したというもので
ある。一体贖手紙を作って裏切り者の烙印を押そうとす
る趣向は、どこから思い付かれたのか。『通俗漢楚軍談』
に、道真と似通った運命(主君との信頼関係を崩され、失
脚して流されてそこで死を迎える)をたどった人物がい

る。項羽の軍師范増である。彼は、項羽に忠を尽くすが、
敵方の謀略にはめられる。その謀略により、項羽に逆心
ありと疑惑を抱かれ失脚し流される。范増は、その流さ
れた先で、背中にひどい出来物ができて化膿し失意の中
で死ぬ。死後、項羽は、范増の忠義に気づき後悔する。右
のことを確かめた上で注目したいのは、范増程の知恵者
がはめられた謀略である。『通俗漢楚軍談』卷十一「反間計
范増憤死」で何とか范増を除こうとした張良・陳平が、贖
手紙の計略を考えつく。項羽からの使者虞子期に、范増
が劉邦方へ内通しているかのごとき贖手紙をわざと盗み
見させる。

虞子期見了テ大ニ驚キ是紛ベクモナキ范増ガ書簡ナ
リ近ゴロ彼漢ト内通シテ共ニ楚ヲ亡ント企ル由沙汰
アリシカドモ定テ虚説ナラント思シニ……今又コノ
書簡ヲ見ニ扱ハ人ノ申スモ実ナリト思ヒ密ニ書簡ヲ
袖ノ内ヘ藏シケル

贖手紙を渡された項羽は見て激怒し、范増を信じなくな
る。近松は『通俗漢楚軍談』を読んでいて、道真と范増
の立場・運命の近似性に気づき、道真失脚の趣向を范増
の故事を利用して作り出したと思われる。

また『天神記』は、第二で、時平は大物の浦から舟出
した後、道真を殺すよう蔵人と兼竹に命じている。

扱又別していふこと有と小ごゑに成、たとへ遠国に
ながされても、ながらへあらば後日のあた、流人船
大物の湊を二三里もこぎはなる、じぶん、早舟にて
ぼつ、め兵庫わだのみさきへん、海賊の体にて菅丞
相を海へ切て切ながせば、跡に何の氣遣なくねざめ
もやすき

この命に対し、蔵人は承知するが、兼竹は強く反対する。
その中でこういつている。

菅丞相には情を蒙り恩を受し者多く、なごりをおし
み陸地舟路よそながら、見をくる者多かるべし、是
らがきよりと見物して、菅丞相を討せ御へんをい
けて置ふか

と岸からの目を恐れる。これも、『菅家瑞応録』などには
見えない話である。どこから来たのか。やはり、『通俗漢
楚軍談』が気になる。『通俗漢楚軍談』において、左邊の
船中で護衛の者に殺される人物がいる。項羽に取り立て
られた懐王である。『通俗漢楚軍談』巻五「項羽江中弑義
帝」で、項羽は英布等へこう命じる。

若早く除ズンバ後ニ大ナル害ヲ成ントテ……申ケル
ハ汝等兵ヲ引テ東ニ赴キ……義帝モシ江ヲ渡ラハ汝
等出迎ル躰ヲナシテ斬殺シテ江ニ沈メ大風ニ遇テ舟
覆リヌト披露シテ天下ノ議論ヲ塞ゲ……

そして、英布が義帝を殺す時、岸から見ていた者達が叫
び回っている。

南ノ岸ニ義帝ヲ待奉ル百姓ヲメキ叫テ逆賊英布汝項
羽力悪ヲ助テ罪ナキ義帝ヲ弑シ奉テ天下ヲ奪ントス
我等アマネク天下ニ告テ然ルヘキ君ヲ取立義帝ノ為
ニ喪ヲ発シ汝等ガ無道ヲ誅シテ天下ノ恨ヲ雪ベシト
罵リ……

この部分が、『天神記』に影響を与えたと見なせる。つま
り、近松における『通俗漢楚軍談』受容は、少なくとも
『天神記』まで遡源可能である。

もちろん、ここまで述べてきた『通俗列国志後編』『通
俗漢楚軍談』との関連箇所は、比較的明確なものである。
もし、今回の指摘が認められるのであれば、関連を想定
できる箇所は増えることが予想される。

五 課 題

近松作品と他の通俗軍談（『通俗三國志』『通俗列国志
後編』『通俗漢楚軍談』以外のもの）との関わりは、未詳
のままである。したがって改めて検証を要するが、これ
に加え、同時期における他の作家たちの作品での通俗軍
談受容のあり方も調査してみたい。

具体的には、まず、近松のライバルであった紀海音で

ある。海音の場合、享保六年初演『呉越軍談』を執筆していることから、『通俗列国志後編(通俗呉越軍談)』との関係は検討すべきであろう。さらに享保四年初演『義経新高館』で『通俗漢楚軍談』との関連がうかがえる箇所があり、『通俗漢楚軍談』も看過できない。

また浮世草子での通俗軍談利用も、実は十分に判明しているとは言えない。従来、長谷川強氏『浮世草子の研究』によって、西沢一風『風流三国志』での『通俗三国志』利用、江島其磧『通俗諸分床軍談』『世間娘気質』『鎌倉武家鑑』『国性翁明朝太平記』での『通俗漢楚軍談』『通俗唐玄宗軍談』利用が指摘されていた。これにつけ加える形で、近時、拙稿「其磧と中国故事」(『国語と国文学』平成四年二月号)が、『風流曲三味線』における『通俗唐玄宗軍談』の影響を報告した。しかし、其磧の場合であっても、晩年の作品に『通俗列国志後編』と関わる部分が散見するなど、未だ検討の余地がある。

近世文芸と通俗軍談の関わりは、従来考えてきた以上に早くかつ深かったのではないか。今後、この点について幾分かでも明瞭にしたい。

〔注〕

1 この点に関連して、藤井乙男氏『近松全集』(朝日新聞社

版)第十一卷の解説に指摘がある。『国性翁後日合戦』第二段が『三国志演義』第四回に見える曹操の故事に基づくとする。『三国志演義』ではなく『通俗三国志』と修正した上で肯首できる。

2 『通俗列国志後編』『通俗漢楚軍談』は神谷蔵本による。引用に際しては、新漢字を用い、振り仮名・返点などは外した。他の引用も同様にした。

3 近松作品は、岩波書店『近松全集』による。

4 樋口慶千代氏評釈江戸文芸叢書『傑作浄瑠璃集上』の頭注に、「甘輝が妻を殺して鄭芝龍の将となろうとするのは、蓋し呉起が妻を殺して魯の将となったことに暗示(ヒント)を得たものであろう」という指摘がある。典拠を明確にされていないが、先行する指摘である。

5 具体的には、中村忠行氏『台湾軍談』と『唐船噺今国性翁』補正(『山野辺』十九号 昭和五十年三月)で示された見解である。その内容は、天野信景『塩尻』(天明二年成)の巻六十五に収録する朱一貴の乱についての風説が、四点の理由で、近松の利用した資料に関係を持つものという。そこで指摘された四つの理由は、一に、軍師呉二用の名が『塩尻』引用文に見える、二に、苗景龍の名もある、三に、近松は朱一貴に順成王と名乗らせるが、その名も見える、四に、近松は朱一貴の素性を洪武帝までさかのぼって説明するが、『塩

尻』の記事もこれに一致する、である。この見解を諏訪春雄氏『近世演劇史論集』（笠間書院 昭和六十年十月）第七章 国性爺三部作なども支持している。

6 諏訪氏前出書第五章近松十二選第八節国性爺合戦の中で「直接の典拠は、司馬遷の『史記』に叙述されている楚の項羽と漢の劉邦の広武山の対峙のときのエピソードであろう」という形で先行する指摘がある。

（名古屋文理短期大学）